

金型づくりにおける安全と労働環境の考え方

村上 英樹*

金型製作現場における安全と労働環境を考えるうえで、まずは製造業全体における労災の発生状況や問題点を概観し、そこから金型製作現場に潜む危険や悪環境で特に注意すべきポイント、金型製作現場ならではの問題、金型製作現場で必要となる安全・労働環境づくりの考え方などについて見ていきたいと思う(図1)。

製造業全体における労災の発生状況や問題点

まず、製造業全体の労災の発生状況について見ていく。厚生労働省が公表している労働災害発生状況¹⁾によると、2022年には製造業の死亡者数は140人で、全産業の死亡者数774人のうち約18%を占めている。休業4日以上²⁾の死傷者数は2万6,694人で、全産業の

死傷者数13万2,355人のうち約20%を占めている。

令和に入ってから³⁾の製造業の労災発生状況を見ると、死亡者数は2019年の141人、2020年の134人、2021年の131人とわずかに減少していたが、2022年には140人と増加した。休業4日以上²⁾の死傷者数は2019年の2万6,873人、2020年の2万5,330人と減少傾向にあったが、2021年には2万6,424人と大きく増加した。2022年には2万6,694人とさらに増加している。

事故の型別で見ると、全業種では、機械などによる挟まれ・巻き込まれは墜落・転落、交通事故による災害件数より少ないものの、製造業だけで見ると、死亡者数・死傷者数ともに墜落・転落、転倒よりも群を抜いて1位となり、2022年の死亡者数は56人、死傷者数は6,416人となっている。

これらのデータを踏まえた近年の製造現場の問題点として、以下のようなものが挙げられる。

- ① 機械などによる挟まれ・巻き込まれ事故を防止するための安全装置や作業手順などの不備や不遵守。
- ② 墜落・転落事故を防止するための足場や手すりなどの設置や点検などの不備や不遵守。
- ③ 高齢化や外国人労働者の増加に伴う作業能力やコミュニケーション能力などの差異や不足。
- ④ 新型コロナウイルス感染症への対策として行われたテレワークや時差出勤などによる作業環境や体調管理などの変化。

また、昭和・平成から令和へと推移していく中で、その製造現場の安全性の違いとしては、以下のような変化があったと筆者は考えている。

本記事の論点

- ・ 製造業全体の労災発生状況
- ・ 金型製作現場に潜む危険や悪環境
- ・ 金型製作現場で必要となる安全・労働環境づくりの考え方



図1 本記事の論点